

＜社会形成能力…社会形成能力を育む教育の推進と校長の役割＞

心を育て、社会形成能力を高める

～自己肯定感向上の取組を通して～

提案者 岡山県瀬戸内市立邑久小学校長 神 崎 卓

1 提案要旨

(1) はじめに

本市校長会では、「社会形成能力」という研究課題について、キャリア教育の視点での取組を検討した。この視点での取組は、学校規模や児童の実態、地域性等の違いから取組が異なり、校長の役割も大きく異なっていることから、校長会で共通理解事項（キャリア教育の視点での取組等）を決めて、各校がそれぞれ実践・発展させていくことにした。

(2) 研究の概要

① 主題設定の理由

自校は、昨年度から主体性や良好な人間関係の構築を目指して、自己肯定感向上に取り組み始めたところである。校長会教育研究大会の教育課題「社会形成能力」の具体的な要素（他者に働きかける力、コミュニケーションスキル、リーダーシップ等）は、高い自己肯定感を持つ児童の姿と共通する部分が多い。そこで、本研究課題に対し、自己肯定感向上を切り口として取り組むことの効果を期待し、本テーマを設定した。

② 取組の経緯

ア 昨年度

自校の教育目標「自分に自信をもち、挑戦し続ける児童の育成」を目指す3つの自信【学力】【体力】【豊かな心】部会と【生徒指導】部会の4部会を編成し、各部会でプロジェクト的に取組を一つ決め、全教職員で共通理解して推進した。3学期には、アンケートの集約をもとに取組を振り返

り、次年度に向けて、改善・継続するという方向性を確認した。

イ 本年度

新メンバーを迎え、全職員で昨年度の取組や実施方法を検討した上で、6月下旬から本格的に取組を開始した。夏季休業中に振り返りを行い、2学期からの実践につな

③ 取組を決めた視点

ア 自己肯定感の向上につながる

イ 頑張りが結果につながりやすい

ウ 成果・経過が見えやすい

エ 全教職員が全児童に声をかけやすい

オ 児童同士の仲間作りにつながる

④ 各部会の取組内容

ア 学力への自信…漢字検定

イ 豊かな心への自信…くつそろえ

ウ 体力への自信…スポーツイベント

エ 生徒指導の充実…挨拶

⑤ 検証の方法

ア 5年（県）・6年（国）の学習状況調査

イ 学校評価アンケート

⑥ 成果と課題

各取組で自信をつけたり、意欲的に取り組んだりする児童が増えてきた。スポーツイベントは効果が高く、くつそろえ・挨拶は改善した。漢字検定は、自己肯定感の向上の面で、苦手な児童への対応が課題である。

⑦ 自校の実践における校長の役割

ア 方針の提案

学校課題を職員間で共通理解し、課題解決のための方針を決定する。

## イ 組織の編成

教職員全体が関わるプロジェクトチームを立ち上げ、若手教員をリーダーに起用する。

## ウ 広報・啓発

学校便り（児童・保護者向け）、校長室便り（職員向け）等の発信と研修会の企画・実施。

## (3) おわりに

取組は始まったばかりであるが、現在は、全教職員が自己肯定感向上についての意識を強く持ち、日々の教育活動に取り組んでいる。児童に「チャレンジする心」「少々のことではくじけない心」が育つことを期待して工夫改善を加えながら実践を進めていきたい。

## 2 研究協議

## (1) 質問及び協議

## ① グループ協議

## ＜研究協議の柱＞

学校・児童・地域の特性に応じた教育課程及び学習・活動の工夫による社会形成能力の育成と校長の役割

ア 各プロジェクトチームが「自己肯定感向上」を目指して、4つの具体的な取組を行っているが、「一点突破」でとても分かりやすい実践である。学校のめざす方向性が明確となり、ベクトルもそろえやすいと感じた。

また、「社会形成能力」という言葉は非常にわかりにくい、「自己肯定感向上」に絞ることで職員も取り組みやすかったのではないかと思う。

イ 学校の実情に応じて様々な活動が行われるが、教職員に校長の思いがどこまで伝わっているのか、活動のねらいを理解しているのか常に振り返ることが必要である。

ウ 子どもの主体的な活動とするために、児童会の活用も有効である。子ども同士の関わり合いや学び合いを通して子どもに自信と力がついていくと思う。

エ コミュニティ・スクールになっている学校が多いが、地域の人材が学校に入ってくることで、教員とは違う視点で子どもが褒められる経験は貴重な経験である。褒められることによって自己肯定感も高まる。

オ 校内で、縦割り班を作って掃除や給食、遊びなどを行ったり、3、4年生が6年生の学習の様子を見学したりする等、他学年児童と関わる機会を設けることで、他学年同士で認め合う機会にもなり、自己肯定感が高まると思う。小規模校は取り組みやすいが、大規模校は取り組みにくいかもしれない。

## (2) 分科会のまとめ

## ① 提案について

大規模校は、学年の横のつながりが中心になりがちだが、そこに縦割りの意識を入れた取組ができたことは参考になった。また、具体的な取組は小さな取組であるが、それをやり遂げることができれば、教員集団にも子どもにも自信や力がつき、他の取組へと広がっていくなど波及効果が期待される。

## ② 校長の役割

広報・啓発・発信が重要な役割となる。まず、「社会形成能力」の意味を職員に理解させることが大切である。捉え方の例として、

- ・個の確立
- ・より良い人間関係
- ・将来の仕事
- ・どんな生き方をするかなどを校長として示すことが大切である。

また、地域と目標を共有することが大切であり、そのための広報・発信は欠かせない。



＜社会形成能力…社会形成能力を育む教育の推進と校長の役割＞

倉吉に誇りと愛着をもち、自己実現を図る子どもの育成

～社会の発展に貢献する資質・能力・態度を育む教育活動を推進するための校長の役割～

提案者 鳥取県倉吉市立上灘小学校長 山根 操

1 提案要旨

(1) はじめに

倉吉市では、社会の一員として参画・寄与する態度を養うこと、郷土を愛し、他者や他の地域を尊重する態度を養うことを市の教育目標にあげ、地域の人・もの・ことがらにふれる教育活動の推進を図っている。

そこで、倉吉市小学校長会では、地域に誇りを持ち、社会の発展に貢献できる資質・能力・態度を育成する取組について研究してきた。

(2) 研究の概要

① 倉吉市校長会としての取組

子どもたちの状況や社会形成能力を育成するための学校での取組や校長としての役割について協議してきた。

【全国学調質問紙結果から見えてきた状況】

- ・自分を肯定的にとらえている児童の割合は高いが、将来の夢や目標を持っている児童の割合が低い。
- ・地域の行事への参加や関わる機会が多いが、何をすべきか考えることは少ない。

【社会の発展に貢献する資質・能力・態度】

- ・地域を誇りに思い、ふるさとを愛する心
- ・地域や社会の課題を見つける能力
- ・他者と協力・協働して主体的に課題解決に取り組む態度

【校長の役割】

ア 学校経営方針の決定

- ・地域、保護者、学校の強み・弱み等の把

握

イ カリキュラム・マネジメント

ウ 組織づくり

- ・校内組織、地域学校委員会（学校運営協議会）、地域人材活用、関係機関との連携

エ 人づくり

- ・キーパーソン、中核となる職員、ミドルリーダー、個々の教員の力量向上等

オ 情報発信

- ・活動の意味づけ・価値づけ

【各学校での取組】

ア 地域の特色を生かした取組・交流活動

- ・地域産業体験、体験田活動、防災活動、開筵式等

イ 学校での人間関係づくり・ものごとを解決していく力の育成

- ・児童会活動、縦割活動等

ウ 身近なモデルを見せる活動・接する活動

- ・12歳のハローワーク、先輩の話等

② 上灘小学校での取組

【学校経営方針の決定】

学校経営方針について地域学校委員会で説明し、地域の意見を踏まえながら決定している。「めざす子ども像」に「ふるさとを大切に子」を、「本年度の重点」に「地域とともにある学校づくり－保護者・地域との連携・協働（ななめ人間関係づくりの充実）」を入れ、社会形成能力を育成するために取り組んでいる。

【「ふるさと学習上灘 人・もの・こと活用

### 年間計画」の作成・活用】

児童が、ふるさとの一員としてできることを考える内容も含め、6年間を見通した内容になるよう検討・修正を続けている。

### 【地域人材の活用と家庭・地域との連携・発信】

地域人材活用のため、学校支援ボランティアを募集し、現在約100名の登録がある。地域コーディネーターが必要に応じてコーディネートしている。

#### (3) おわりに

校長の方針がしっかりしていることが大切である。地域の強みを把握して教育に生かしていくことで、教育を充実させていくことにつながっていく。

方針を形で示すためにふるさと学習計画は有効であった。学校としての全体像を職員で共有するとともに、地域学校委員会でも理解・協力を得ることができた。

校長が「地域とともにある学校づくり」の意識を持ち、保護者・地域の協力体制を充実させ、ふるさとに誇りと愛着をもち、自己実現を図る子どもの育成に取り組んでいきたい。

## 2 研究協議

### (1) 質問及び協議

#### ① グループ協議

##### <研究協議の柱>

社会形成能力を育む教育活動の在り方と校長の役割

ア 全国学力・学習状況調査質問紙やアンケート等の調査結果から見えてきた課題を基に取組が行われている。また、実態や課題を保護者や地域とともに共有し、子どもに付けたい資質・能力にそった活動を実施していくことが大切であることを感じた。地域の望みや要望と学校の願いを一致させる難しさがあるが、本音で語り合える関

係づくりを行っていくことが必要である。

イ 「ふるさと学習上灘 人・もの・こと活用年間計画」の作成や学校支援ボランティアの活用の報告があった。「取組の見える化」をしていくことが大切である。子どもにとって地域や人との関わりが身近に感じられるものになっている。指導する教師にとっても、ねらいの明確化や取組の共有化が図れ、よりよい実践につながっていく。

ウ 地域との連携役は校長だけでなく教頭、地域連携担当、事務職員等様々な教職員が関わることになる。校長として様々な立場にいる教職員をキャリアに応じて育てていくという視点や取組が求められる。

#### (2) 分科会のまとめ

「社会形成能力を育む校長の役割」として以下の点が重要である。

##### ① 校長の方針を明確に示す

- ・各種調査等を基に課題を明らかにする。
- ・地域の強みを把握し、学校教育に活かす。
- ・「教育目標」「めざす子ども像」「本年度の重点」の教職員・保護者・地域との共有化が必要である。
- ・地域学校委員会で提示し、理解・協力を得る。

##### ② カリキュラム・マネジメント

- ・「ふるさと学習年間計画」の作成と活用
- ・学校支援ボランティアの活用とコーディネート

##### ③ 人材育成

- ・教頭、中核となる職員、ミドルリーダーの力量向上



〈自立と共生…共生社会の実現を図るための教育の推進と校長の役割〉

一人一人の自立を目指した特別支援教育の推進

～個のニーズに応じた支援体制の充実に向けて～

提案者 島根県奥出雲町立八川小学校長 三島 啓介

1 提案要旨

(1) はじめに

特別支援教育の充実について、仁多郡校長会としても特に重要な課題として捉え、取組を重ねてきている。

そこで、仁多郡校長会では、障がいの有無に関わらず、個々のニーズを的確にとらえながら、子どもたち一人一人に学ぶ喜びを味わわせるとともに、個性や能力を最大限伸ばしていくことを目指し、各校における支援体制を充実させていくことにした。

(2) 研究の概要

① 仁多郡校長会としての取組

ア 「にこにこの会」の活動への参加

仁多郡内の特別支援学級在籍児とその保護者の会である「にこにこの会」では、運動会やハゼ釣り、クリスマス会、発表会と、年間を通じて交流学習が進められている。校長会としては、できるだけそのすべての活動に校長が参加するよう申し合わせている。

イ 学校間の情報共有及び研修の実施

宿泊研修や修学旅行、その他体験学習等の合同行事を実施する場合、初回の打合せ会には必ず全校長が参加している。併せて、毎月1回の校長会においても、小・中学校ごとや中学校区ごとの情報交換や研修会を実施し、横のつながりと縦のつながりを強めている。

② 八川小学校の取組

ア 幼稚園との連携の充実

- 入学予定児の児童理解のために

毎月1回ずつ、「幼小管理職会」を設け、子どもたちについての情報を共有している。また、保育・授業公開への相互参加や、小学校教員が幼稚園に出向いての保育体験も行っている。

○ 小1プロブレムの解消のために

- ・ロードレース大会，避難訓練，観劇教室等の合同行事の実施
- ・小学校での身体測定，給食体験，図書の貸出し，入学式リハーサル
- ・小学校教員による園児向けの体験授業「しょうがっこうにいこう！」

イ 教育のユニバーサルデザイン化

○ 教室環境のUD化

視覚刺激の低減 等

○ 授業のUD化

視覚化，焦点化，共有化 等

○ 人的環境のUD化

よいとこみつけ，学級遊び，縦割り班活動，特支教育COと管理職の動き 等

○ 多様な学びの場の保障

支援学級の弾力的運用，朝チャレ 等

③ 校長の役割

校長自らが率先して特別支援教育に関わっていかうとする姿勢を示すことである。

また、校長会において各校の取組状況等を情報交換してきたことにより、他の小学校への取組の広がりが見られただけでなく、中学校との連携も深まった。

校長がリーダーシップを発揮すること、そして、異校種や関係機関と学校とをつなぐ役割を果たすことが重要である。

(3) おわりに

① 成果

ア 全ての子どもを校内の全職員で支援して  
いこうとする雰囲気の高まり

イ UD化への意識の高まり，学力の定着，  
自己表現の力の向上

ウ 小1プロブレム，中1ギャップの軽減

② 課題

ア 教職員一人一人の専門性の向上

イ 関係機関との連携の在り方

## 2 研究協議

(1) 質問及び協議

① 質問と回答

Q 多様な場の設定として「朝チャレ」は  
いつ行っているか。

A 朝の活動時間，15分間に行っている。  
事務職員以外の教職員が児童に対応し  
ている。

Q 小学校教員の保育体験について，職員  
が負担を感じていないか。また，難しか  
ったと感じたところはどこか。

A 職員が自ら保育体験をしてみたいと  
言っている。一日体験を実施しようと思  
ったが，半日体験を基本とした。希望に  
より，一日体験も設定している。

教職員は，保育の補助として入ってい  
る。朝のオリエンテーションで活動の確  
認をしている。いざ，保育体験を実施す  
ると「どう関わってよいか困った」「小学  
生とは対応の仕方が違う」等の声を聞い  
ている。

Q 「にこにこの会」は任意の団体なのか。

A 任意の団体である。現在，仁多郡内の  
特別支援学級在籍児とその保護者，担任，  
校長が入っている。保護者会長も決めて  
いる。

② グループ協議

<研究協議の柱>

幼稚園・保育園等との連携の在り方につ

いて

ア 「にこにこの会」は校長会としてのネッ  
トワークをつくる良い取組であるが，自分  
の校区ではなかなか連携の回数が取れな  
いのが実情である。幼稚園が近い場所にあ  
るので連携も取りやすく，管理職同士の心  
の距離も近くなると感じた。保幼小の接続  
カリキュラムも参考にしながら，保育実習  
や交流の可能性を広げていきたい。

イ 他校との特別支援学級同士の連携がで  
き，「にこにこの会」は，良い取組だと思っ  
た。自分の校区も合同学習等を通して，同  
様の取組を行っている。近年，特別支援学  
級の児童が急激に増加し，他校との交流が  
難しくなっている。

学校同士の連携はどのように行っている  
か。

→10校が2つの中学校へ進学する。たたら  
体験学習，顔合わせ会，5年生の宿泊学習，  
6年生の修学旅行等を行って，交流や連携  
をしている。

ウ 10校の小学校が集まって活動している  
「にこにこの会」の取組は，素晴らしい。  
校長がリーダーシップを取ることで，保護  
者とも仲良くなれる。そして，通常学級に  
もそのつながりを返していくことができ  
る。

(2) 分科会のまとめ

八川小学校の様々な活動を通して，校長  
のネットワークや保幼小の連携の大切さ  
を実感した。





<連携・接続…家庭・地域等との連携と異校種間接続の推進と校長の役割>

## 保幼小の円滑な連携・接続の在り方と校長の役割

～育ちと学びをつなぐ支援体制の構築に向けて～

提案者 鳥取県米子市立淀江小学校長 加藤 渉

### 1 提案要旨

#### (1) はじめに

小1プロブレムの未然防止に向けての取組は、小学校の課題の一つとなっている。また、幼児期から児童期に向かう子どもたちの育ちと学びをつなぎ、将来に向け主体的に生きる力をつけていくことも今求められている。

そこで、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われるような取組を行う上での、校長の果たす役割を究明する。

#### (2) 研究の概要

保幼小連携については、これまでも各学校で行われてきたが、保幼と小とで意思疎通が十分図られていなかったり、交流活動も一過性であったりと課題も多く見られる。近年、行政でも保幼小連携の取組を強化しているが、学校現場の声をしっかり届け、行政の取組とつながることで、さらなる保幼小連携が充実したものになると考える。

##### ① 米子市小学校長会の取組

ア 毎月1回定例校長会での情報交換や意見交換

イ 保幼小連携に関するプロジェクト組織による連携の推進

ウ 就学前教育を語る会

##### ② 淀江小学校の取組

保幼小連携推進委員会を位置づけ、計画

性・互恵性のある活動を行う。

ア 組織をつなぐ「園長・校長定例会」

月に1度、校区内にある3つの保育園の園長と校長で開催する。職員のつながりも深まり、子どもの交流活動も活発になる。

イ 人をつなぐ「小学校オープンスクール」

小学校生活のイメージを持つことで、スムーズな就学を促すことをねらい、今年度市内で8校をモデル校として実施した。

このオープンスクールを機に、就学時健診、生活科交流、入学説明会、3園交流と連続性を考えた園児と児童の交流の場を予定している。

ウ 教育をつなぐ「保育体験」

町内にある3つの保育園と近隣の1つの幼稚園で、夏休みに全教員が保育体験を行う。特に、年長児の特性を理解することは、小学校のスタートカリキュラム作成につながっていく。

事前に、行政からのシートや園長・校長定例会で挙げた配慮を要する園児の実態が分かり、入学後の関わり方に活かすことができる。



## ③ 校長の役割

- ア 保幼小連携の教育的課題を掘り起こす。
- イ 明確な教育ビジョンを示し、機能的な組織・体制づくりを推進する。
- ウ 取組について教職員に共通理解を図り、助言・評価を行う。
- エ 校長会で意思統一をし、積極的に行政への働きかけを行う。

## (3) おわりに

小1プロブレムの解消や、主体的に生きる力を育てる保幼小連携推進のためには、校長のリーダーシップのもと、課題を明確にし、推進組織を位置づけ教職員全員で取り組んでいくことが大切である。

特に、組織や人をつなぐ連携は進んでも、教育をつなぐカリキュラムの接続については、まだまだ進んでいない現状がある。

課題解決のためには、その部分が果たす役割も大きい。しかし、各学校だけでは困難なこともあるので、さらに、米子市小学校長会として、行政への積極的な働きかけ等、継続して保幼小の円滑な連携・接続の在り方を探っていききたい。

## 2 研究協議

## (1) 質問及び協議

## ① 質問と回答

Q 資料の中にはスタートカリキュラムの作成とあるが、これは校長と園長が話し合いを行い、淀江小学校独自で作成されたものなのか、それとも米子市全体でスタートカリキュラムがあるのか。

A 米子市全体ではなく淀江小学校独自のものである。保育園・幼稚園のことは意識せずに小学校だけで作成していたが、幼児期の終わりまでに育てたい力を考えて保育園・幼稚園側のアプローチカリキュラムが作成してあるので、さらに検討・見直しをしていきたい。

## ② グループ協議

## &lt;研究協議の柱&gt;

## 保幼小連携の現状と校長の役割

ア オープンスクール、接続プログラム等直ぐにでも実践したい内容であった。就学前教育を語る会は校長会が中心となって行われており、そこに行政を交えて実施していることは素晴らしい。保幼小連携を何のためにするのかを教育課程の中に位置づけることが大切である。自治体の大きさに合わせて、普段から保護者同士つながることができるようにしていきたい。

イ スタートカリキュラム作成後、検討がされていなかったり、周知徹底できていなかったりする。アプローチカリキュラムの情報共有も必要である。新入生の子どもたちの情報をどうつないでいくかも重要である。保育園や幼稚園に見学に行くことで園の先生から子どもの接し方について学ぶことが多い。

## (2) 分科会のまとめ

校長自らが保幼小の連携にむけての明確な目標を持ち、その目標達成のためのビジョンと計画を打ち出し、実践していくことが大切である。そのためには校長のリーダーシップのもと人と人をつなぎ、人や組織をつなぎ、子どもと保護者の不安感を解消することが重要である。また、校長会のネットワークも活用していくことが必要である。

